

「生の軌跡」

—Traces of Life—

2021年11月13日(土)～2022年3月6日(日)



武澤久《銀河》1991年

はじめに

アーツ前橋では収蔵作品を中心に、地域ゆかりの作家の作品や県内の美術館、コレクターの所蔵作品とともに構成するテーマ展、〈コレクション+〉を開催してきました。今回の〈コレクション+〉では、「軌跡」をテーマに、絵画、写真、映像、立体、インスタレーションなどの多彩な作品を紹介します。

「軌跡」は人や物事、時間の辿ってきた跡や、あるいは内的な世界の表出、さらに図形を表す線など多くの意味を内包しています。アンドレ・ブルトンの編著書『夢の軌跡』では、シュルレアリスムにもとづき「夢」は芸術の根源とされる無意識の象徴とされ、その軌跡は言葉や造形としてかたちを得て、詩や絵画として芸術の華を咲かせます。また「軌跡」とは文字どおり「線」そのものを示しています。線によって描かれるドローイングには思考の源が表れ、また線の軌道が描き出す「円」には、抽象的、幾何学的な形態のみならず、精神的なものを含めた概念や関係性を見出すことができます。本展では、無意識の表象、あるいは行為や運動の記憶など、さまざまなかたちで表出する「軌跡」についての考察を試みます。

開催概要

【展覧会名】「生の軌跡」—Traces of Life—

【会 期】2021年11月13日（土）～2022年3月6日（日）

【開館時間】10:00～18:00（入場は17:30まで）

【休 館 日】水曜日、年末年始 2021年12月28日（火）～2022年1月4日（火）

2022年2月23日（水・祝）は開館し、2月24日（木）は休館

【会 場】アーツ前橋 1F ギャラリー、地下ギャラリー

【観 覧 料】一般500円／学生・65歳以上・団体（10名以上）300円／高校生以下無料

※ 障害者手帳をお持ちの方と介護者1名は観覧無料

※ 2022年1月9日（日）前橋初市まつりのため観覧無料

【出品作家】

田島弘章、河口龍夫、駒井哲郎、砂盃富男、廣瀬智央、ジャン・デュビュッフエ、佐藤敬、掛井五郎、マックス・エルンスト、瑛九、ソル・ルウィット、福沢一郎、村田峰紀、小泉明郎、菅野創+やんツー、金子真珠郎、鈴木ヒラク、津上みゆき、山口薫、榎木陽子、岡本健彦、塩原友子、オノサトトシノブ、白川昌生、加藤アキラ、鬼頭健吾、伊藤存、武澤久

本展の見どころ

1. 芸術の根源とされる無意識の「軌跡」として表出する線や抽象的なイメージに着目し、それが描き出すものを感覚的に鑑賞することで、誰もが子どもの頃に持っていた自由な心を呼び覚まし、美術作品や展覧会との距離を近づけます。
2. 本展のテーマにもとづく、群馬県内の美術館をはじめ、所蔵家や作家の所蔵する貴重な作品が一堂に会する、貴重な鑑賞の機会を創出します。
3. 「軌跡」というテーマを共有する作品により展覧会を構成することで作品が共鳴し合い、当館の収蔵作品の新たな魅力を感じていただけます。

関連イベント

「学芸員によるギャラリートour」

【日 程】11/23(火・祝)、12/11(土)、2022年1/22(土)、2/12(土)、3/5(土)

【時 間】いずれも 14:00 から

【参加費】無料 ※要観覧券

※ 要事前電話申込 各回先着 10名 TEL 027-230-1144

※ 新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、中止・変更の可能性がありますので、当館HPまたはSNSで最新情報をご確認ください。

※ 「アーティスト・トーク」、「オンラインイベント」等については新型コロナウイルス感染症の拡大状況を鑑みて検討中です。最新情報は当館HPまたはSNSでお知らせします。

内覧会／プレス向けツアー

【期 日】2021年11月12日(金)

【時 間】15:00～18:00

※ 15:30より出品作家と担当学芸員が作品を紹介します。

※ 要事前電話申込 TEL: 027-230-1144

お問い合わせ先

アーツ前橋

前橋市役所文化スポーツ観光部文化国際課

担当：堺（広報担当）、北澤（学芸担当）

〒371-0022 群馬県前橋市千代田町 5-1-16

TEL : 027-230-1144 FAX : 027-232-2016 HP : <https://www.artsmaebashi.jp/>

E-MAIL : artsmaebashi@city.maebashi.gunma.jp

交通案内

●電車

JR 前橋駅北口から徒歩約 10 分

上毛電鉄中央前橋駅から徒歩約 5 分

●自動車

関越自動車道 前橋 I.C から車で約 15 分



※地図内Pマークの駐車場のご利用に関しては、駐車券に割引処理いたします。

広報用画像

【1】



【2】



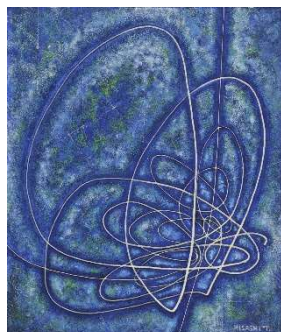
【3】



【4】



【5】



【6】



【7】



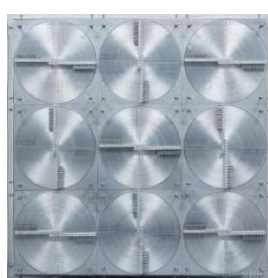
【8】



【9】



【10】



【11】



【12】



記事掲載についてのお願い

- ・掲載にあたっては、展覧会名と会期を表記してください。
- ・画像等を掲載する場合は、キャプション・クレジット等を正確に表記してください。
- ・掲載記事やVTRは、資料として保管いたしますのでアーツ前橋までご送付ください。
- ・取材及び収録等の際は、必ず事前にお問い合わせください。

アーツ前橋「生の軌跡」展 広報用画像申込書

アーツ前橋 広報担当 宛 FAX 027-232-2016

ご希望の画像の番号に○をつけてください。画像(JPEG)をメールにてお送りいたします。

*本展覧会の広報を目的とする場合に限り、提供致します。個人のブログ等への掲載や鑑賞等を目的とする場合には提供できません。

*掲載にあたっては、キャプション・クレジット等を正確に表記してください。

番号	キャプション・クレジット等
【1】	田島弘章 [題不詳] 1962年
【2】	白川昌生《AKAGI》1995年 撮影：木暮伸也
【3】	砂盃富男 [題不詳] 1964年頃
【4】	河口龍夫《闇に潜む浮遊物》1963年
【5】	武澤久《銀河》1991年
【6】	福沢一郎《聖母像》制作年不詳
【7】	金子真珠郎《泣く児》制作年不詳
【8】	榎木陽子《シティーランナー》2010年
【9】	塩原友子《ひかり》1990年
【10】	加藤アキラ《REPORT-EA9》1966年
【11】	鈴木ヒラク《Constellation#19》2017年 撮影：神宮巨樹
【12】	伊藤存《みえない土地の建築物／前橋》2013年 撮影：木暮伸也

※全てアーツ前橋蔵

媒体情報 *できるだけ詳しくご記入ください。

発行日：		発行元：	
貴社名：			
部署名：		担当者名：	
所在地： 〒			
TEL：		FAX：	
E-MAIL：			

【生の軌跡展 出品作家略歴】

1 田島弘章 1936年群馬県前橋市生まれ、2017年没

1963年、砂盃富男らと「群馬 NOMO グループ」を結成し、群馬の前衛美術を牽引する。印刷業を営んでいた田島はNOMOグループ活動期において、謄写版印刷機を使用した版画作品など、印刷にかかわる道具や技術を使用した作品を発表した。1970年代から1980年代にかけては、魚や鳥、円をモチーフにしたドローイングおよびデカルコマニーによる作品、1980年代から晩年にかけては、絵具や石膏、既製品などをアッサンブラージュしたタブローを制作し、1990年代以降は個展を中心に前橋市内で発表を続けた。

2 河口龍夫 1940年兵庫県生まれ、千葉県在住

1960年代より鉄・銅・鉛などの金属、化石や貝、植物の種子などを用いて、物質と物質、あるいは物質と人間との間の目に見えない「関係」を視覚化、造形化してきた。1965年には「グループ〈位〉」を結成、集団で思考し、それを作品として表すことを試みる。「第10回日本国際美術展（東京ビエンナーレ 人間と物質）」（1970年、東京都美術館他）、「大地の魔術師たち」（1989年、ポンピドゥー・センター、パリ）など国内外で多くの展覧会に出品、2009年には東京国立近代美術館で個展「河口龍夫展 言葉・時間・生命」が開催された。2017年、第58回毎日芸術賞受賞。

3 駒井哲郎 1920年東京都生まれ、1976年没

慶應義塾普通部在学中からエッチングを学び、1942年東京美術学校（現・東京藝術大学）油画科卒業。生涯にわたりエッチングを中心とする制作を続けた。夢と現実の織り成すその表現は、銅版画という目に見える「かたち」を通して、目に見えない「こころ」のうちを表している。心の眼で見た現象や現実を、鋭い感性と熟達した技術により銅版画として、黒いインクと白い紙で豊かに表現している。銅版画を追求する一方、「実験工房」での活動や詩画集の出版などで、文学や音楽との領域横断的な表現を試みた。2018年には横浜美術館で大規模な個展「駒井哲郎—煌めく紙上の宇宙」が開催された。

4 砂盃富男 1930年群馬県前橋市生まれ、2001年没

1957年近藤嘉男が主宰する「生活造形実験室」に参加し、講師であった金子真珠郎と出会い、シュルレアリスムやアンフォルメル技法などを学んだ。1963年に「群馬 NOMO グループ」を結成、以後「やまだや画廊」を中心に発表を行い、「読売アンデパンダン」などへ出品した。銀行に勤務する傍ら、作品の制作と蒐集をおこない、エッセーや美術批評なども数多く執筆した。退職後は、自宅を使って「イサハイ・ベル・イマージュ美術館」を開館し、収集した作品を展示してきた。

5 廣瀬智央 1963年東京都生まれ、イタリア、ミラノ在住

多摩美術大学卒業後、イタリア政府給費奨学生として渡伊、ミラノ・ブレラ美術アカデミー修了。国内での主な個展に「パラディーゾ」（1998年、水戸芸術館、茨城）、「2001」（2000年、広島市現代美術館、広島）など。2020年にはアーツ前橋で個展「廣瀬智央 地球はレモンのように青い」を開催した。異文化の体験を推敲し多様な素材を用いて視覚化した、浮遊感を伴う作品を制作。境界を越えて異質な文化や事物を結びつける脱領域的な想像力が創造の原理となり、日常の体験や事物をもとに世界の知覚を刷新する表現を創りだしている。

6 ジャン・デュビュッフ 1901年フランス、ル・アーヴル生まれ、1985年没

画家、コレクター、著述家。パリの美術学校に約半年間在籍したが、その後はほぼ独学で絵画を学ぶ。伝統的な様式や技法にとらわれず、西洋文明そのものを否定して、子どもや未開の地の人、精神に障害をかかえる人などによる、粗くても生命力が漲る表現をアール・ブリュット（生の芸術）と名付ける。その作品には、伝統的な美術を痛烈に批判し、アカデミックな造形理論を否定することによる、既成概念に縛られない創造力による、根源的で直接的な衝動のイメージが表出している。

7 佐藤敬 1906年大分県生まれ、1978年没

13歳の頃、中学校の図画工作教師であった山下鉄之輔に指導を受け美術に目覚め、15歳から油絵を描くようになり、東京美術学校（現・東京藝術大学）で西洋画を学ぶ。1930年に渡仏し、翌年にはサロン・ドートンヌに入選。1934年に帰国、1936年には新制作派協会を設立する。戦時中には従軍画家として戦地に赴く。1952年に朝日新聞特派員として再渡仏し、以後25年間パリを中心に活動した。潜在意識の中にある芸術の根源を感じさせる絵画を描き続けた。

8 武澤久 1914年福井県生まれ、2010年没

1936年東京美術学校（現・東京藝術大学）西洋画本科卒業後、美術教員として群馬に赴任し、前橋高等女学校、前橋高等学校をへて1957年には群馬大学の非常勤講師を務める。前橋高等女学校時代の生徒の中には塩原友子がいた。1948年から1950年まで自由美術展に出品。1950年以降はモダンアート協会に出品し、1974年会員に推挙される。1993年に「武澤久―画業60年の系譜」（群馬県民会館）を開催。1990年以降は、描線のかわりに紐線を用いて輪郭線を際立たせた、より空間性と奥行のある作品や宇宙をモチーフとする作品を制作した。

9 掛井五郎 1930年静岡県生まれ、東京都在住

19歳の時、木内克の彫刻に出会い、彫刻家を志す。1950年に東京藝術大学に入学、彫刻科、彫刻専修科と進む。1957年新制作に初入選（新作家賞）したことから、以後同会に出品、1961年新制作協会会員となる。1968年から1970年まで、ベラクルス大学（メキシコ）の客員教授を勤めた。1991年に桐生に移住し、1996年にはアトリエを東京に移し制作に専念する。1982年に高村光太郎賞、1992年に中原悌二郎賞受賞を受賞。制作の対象は常に強い興味を持ち続けている人間であり、絶えず新たな試みに挑戦し続けている。

10 マックス・エルンスト 1891年ドイツ、ブリュール生まれ、1976年没

ボン大学（ドイツ）で哲学を専攻。第一次世界大戦後、詩人のジャン・アルプ等とケルンのダダを結成。その後パリに移り、シュルレアリスムグループに加わり、コラージュ、フロッタージュ、デカルコマニーなどの技法で新表現を開拓し、画家、彫刻家、詩人として、シュルレアリスムの代表的作家のひとりとなる。第二次世界大戦中にニューヨークに亡命し、後の抽象表現主義などにも多大な影響を与えた。自意識が介在できない状況下で絵画を描くことによって、無意識の世界を表現しようとした。

11 瑛九 1911年宮崎県生まれ、1960年没

本名は杉田秀夫。1925年、日本美術学校洋画科に入学し、東京で生活を始める。この頃、詩や美術評論を多く残している。1930年にオリエンタル写真学校に入学。1936年に最初の印画紙による作品を『眠りの理由』と題して刊行し、この時から瑛九という名を使用し始める。1940年代からは、絵画や版画の制作を意欲的に行う。1951年、デモクラート美術家協会を結成。オノサト・トシノブとは深い親交があった。瑛九自身が「フォト・デッサン」と呼んだ技法は、もとはフォトグラムと呼ばれたもので、印画紙の上に直接物体を置き感光させることによって、モノクロームのイメージ像を浮かび上がらせる。

12 ソル・ルウィット 1928年アメリカ・コネティカット州生まれ 2007年没

1960年代より、立方体の基本構造をシステムティックに視覚化した「シリアル・プロジェクト」シリーズの制作を始め、芸術のもっとも重要な要素は概念であり、作品制作に伴う計画・方法・実行は形式的なものにすぎないというコンセプチュアル・アートの解釈を発表する。さらに自らが関与することなく指示書によって第三者に制作を委ね、決まった長さの線を放射状に描く「ウォール・ドローイング」シリーズを展開。この手法は立体作品にも応用されている。コンセプチュアル・アートから出発し、構造面を重視するミニマル・アートの形態をとっていったが、一貫して根底にあるのは、作者の意図を排除し、鑑賞者に思考をもたらすことであった。

13 福沢一郎 1898年群馬県富岡市生まれ、1992年没

1930年代にフランスのシュルレアリスムを日本に紹介するとともに、社会批評のメッセージを機知にとんだ表現で描き出し、前衛美術運動の中心的役割を果たし、今もなおその影響力は大きい。大正末期から平成へと至る画業において、さまざまに主題と作風を変えながら制作に取り組み、量感あふれる人体表現や独特な色彩感覚が観るものを惹きつける。作品の根底には常に強い批判精神や鋭い洞察力があり、同時代の美術や社会、そして人間そのものの姿をとらえ続けた。

14 村田峰紀 1979年群馬県前橋市生まれ、前橋市在住

2005年多摩美術大学美術学部彫刻学科卒業後、「BankART Bank under 35 村田峰紀展」(2008年、神奈川)、「あいちトリエンナーレ 2010 都市の祝祭」(2010年)、「パフォーマンス彫刻」(2013年、ギャラリーハシモト、東京)など、国内外の展覧会やレジデンス事業に参加し、各地でパフォーマンスや作品を発表。言語化することができない感覚や感情を自らの身体で表現する行為としてパフォーマンスをおこない、その結果生み出された痕跡をインスタレーションとして伝えている。村田が線描に用いるのは常に同じボールペンであるが、それは村田の内から迸るリビドーを表出させ、かたちを与えるツールである。

15 小泉明郎 1976年群馬県邑楽郡生まれ、横浜市在住

1999年国際基督教大学卒業後、チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン(ロンドン)にて映像表現を学び、2005年から2年間、オランダ、アムステルダムライクスアカデミーで制作活動を行う。国内外で滞在制作し、映像やパフォーマンスによる作品を発表している。映像によって、人間の奥底で葛藤する心理や、常識の枠から溢れ出るような感情を捉える作品で評価を高めている。2016年にアーツ前橋で個展「小泉明郎 捕われた声は静寂の夢を見る」を開催した。

16 やんツー 1984年神奈川県生まれ、東京都在住

2009年多摩美術大学大学院デザイン専攻情報デザイン研究領域修了。デジタルメディアを扱い、表現の主体性を問う作品を多く制作している。文化庁メディア芸術祭アート部門において、《SENSELESS DRAWING BOT》が新人賞（第15回）、《Avatars》で優秀賞（第21回）を受賞。「20th DOMANI・明日展」（2018年、国立新美術館、東京）、「Vanishing Mesh」（2017年、山口情報芸術センター [YCAM]）、「あいちトリエンナーレ 2016」（2016年、愛知）、「Mediacity Seoul 2012 -Spell on you-」（ソウル市立美術館、韓国、2012年）などに参加している。

17 金子真珠郎 1915年群馬県沼田市生まれ、1995年没

1939年に東京美術学校（現・東京藝術大学）油画科を卒業し、研究科に進むが招集を受けて中退。戦後は1947年から制作を再開し、東光会展や日展、独立美術展、読売アンデパンダン展、日本アンデパンダン展などに作品を発表した。1960年、欧米を1年間に渡って旅行後、1962年より合成樹脂による〈PHASE〉シリーズを発表する。1953年から群馬県展運営委員を務め、1969年には県展20周年記念功労賞を受賞するなど、群馬県の美術振興に寄与した。作品のほとんどを火事で焼失し、現存作は少ない。父は同地出身の俳人・金子刀水（1893～1959年）、弟は画家の金子英彦（1924～2010年）。

18 鈴木ヒラク 1978年宮城県生まれ、神奈川県在住

2001年武蔵野美術大学造形学部映像学科卒業、2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了後、シドニー、サンパウロ、ロンドン、ニューヨーク、ベルリンなどの各地で滞在制作を行う。一貫してドローイングと言語との関係性を主題に、平面、インスタレーション、壁画、映像、パフォーマンス、彫刻などの概念を拡張する制作活動を展開している。2017年、FID PRIZE インターナショナルドローイングコンテスト（パリ）でグランプリを受賞。「DRAWING NOW」（2013年、カルーゼル・デュ・ルーヴル、パリ）、「MOT アニュアル 2019 Echo after Echo：仮の声、新しい影」（2019-2020年、東京都現代美術館）など、国内外での多くの展覧会に参加している。

19 津上みゆき 1973年東京都生まれ、神奈川在住

1998年京都造形芸術大学大学院芸術研究科修了。2005年の大原美術館でのアーティスト・レジデンス・プログラムをきっかけとして、日々のスケッチをもとに風景画を描く制作方法を確立する。全て作品のタイトルには“View”という言葉冠しており、それは単に主題が眺めや風景だけでなく、見方や観点という広義を意識しながら制作に取り組んでいる事に由来する。近年の主な展覧会に「Art Meets 01」（2014年、アーツ前橋）、「絵画の現在」（2018年、府中市美術館）、「みつめる－見ることの不思議に向き合う作家たち」（2019年、群馬県立館林美術館）がある。神奈川県立近代美術館（2019年）、長崎県美術館（2019年）での個展などがある。

20 山口薫 1907年群馬県群馬郡箕輪村（現・箕郷町）生まれ、1968年没

旧制高崎中学校在学中の14歳の時に油絵に出会い、1925年東京美術学校（現・東京藝術大学）西洋画科に入学し、その画才を発揮してゆく。1930年から3年間フランスに留学し、フォーヴィスムなど当時の前衛芸術の影響を大きく受けた。自らの視点から感じとれる色彩を写実性とは切り離し描き込むことで、その後の山口の抽象と具象の狭間に位置する画風が確立されていった。1934年に新時代洋画展、1937年に自由美術家協会、1950年にモダンアート協会を結成するなど国内の前衛美術を牽引した。海外の美術展にも積極的に出品し、1960年には第30回ヴェネチア・ビエンナーレ展にも参加するなど、国内外で高い評価を得ている。

21 榎木陽子 1978年石川県生まれ、神奈川県在住

2006年アントワープ王立美術アカデミー視覚芸術学科絵画コース修了。2010年に前橋アートコンペライブ2010 グランプリ受賞する。主な個展に、「Project N 50」（2012、東京オペラシティアートギャラリー）、「愛とその周辺について」（2014、Gallery Den & ST 東京）、「WEWANTOSEE」（2016年、金沢21世紀美術館 Gallery B）などがある。描かれる人物やその背景は極限まで省略され、物や人を隔てる境界は溶解し始めているかのようなようであるが、その奥にある物語の気配を濃厚に感じさせる。

22 オノサト・トシノブ 1912年長野県生まれ、1986年没

10歳より群馬県桐生市に移り住む。津田青楓洋画塾に学び、1935年黒色洋画展を結成。1938年自由美術家協会会員となる。1941年に応召による軍隊生活を経験し、戦後のシベリア抑留を経て1948年に帰国。1955年頃から円の色面を配した作品を桐生のアトリエで描き続けた。油彩画の制作と並行して、油彩画と同様の丸と四角を構成した作品をシルクスクリーン、リトグラフとしても制作した。1964年と1966年にはヴェネチア・ビエンナーレに日本代表として出品し、国際的に注目を集める。親交のあった瑛九、菅井汲らとともに日本の抽象画のパイオニア的存在である。

23 岡本健彦 1934年神奈川県生まれ、2016年没

多摩美術大学で絵画を学び、大学卒業後の1963年に渡米。ニューヨークで当時の美術の最先端の動向にふれ、色面を明確な線で区切ったハードエッジやシェイプト・キャンバスによる表現を始める。アメリカ現代美術の影響を受け、独自の絵画を追求し、その後1968年に帰国。1980年代を通じてアクリル板に着色したレリーフ状の作品を発表。1992年より群馬県多野郡吉井町（現・高崎市吉井町）にスタジオ兼住居を構え、合板や金属を半立体的に組み合わせるなど絵画表現の新しい可能性に挑み続けた。

24 塩原友子 1921年群馬県前橋市生まれ、2018年没

群馬県女子師範学校を卒業後、約10年間教職に就いた後、1950年、武蔵野美術学校（現・武蔵野美術大学）に編入。1950年代後半からは井上三綱に影響を受け、画面への即物的な操作やコラージュ技法を制作に取り込んでいく。初期の作品には写実的な風景や人物が中心に描かれているが、1960年代に入り日本画の変革を目指す「日本画研究会」に参加。その後は伝統的な日本画の素材を用い、日本の風土や美意識によって培われてきた線や色彩などを用いながらも、コラージュの多様な展開や版画的な技法、幾何学的な画面構成を取り入れるなど、伝統的な日本画の概念を越え、枠にとられない独自の表現を模索し続けた。

25 白川昌生 1948年福岡県生まれ、前橋市在住

1981年にデュッセルドルフ美術アカデミーを修了。1983年に帰国後、群馬県を拠点に活動をする。欧米や都市部を中心とした芸術の価値観とは異なる、自分が生活する場所の歴史や文化との関りから作品制作を実践してきた。ホームセンターなどで容易に手に入る素材によって構成主義的な彫刻作品も長年にわたり制作。1993年に「場所・群馬」成立宣言を行い、芸術における地域性に注目し、変貌し、衰退していく街の姿を記憶するような作品を多く手掛けてきた。2014年にはアーツ前橋で個展「白川昌生 ダダ、ダダ、ダ 地域に生きる想像☆の力」、2021年は原爆の図丸木美術館（埼玉）にて「白川昌生展 ここが地獄か、極楽か。」が開催された。

26 加藤アキラ 1937年群馬県高崎市生まれ、高崎市在住

1966年の「第10回シェル美術賞」で佳作入選し、「現代美術の動向」展（1969年、京都国立近代美術館）に出品、「第4回ジャパン・アート・フェスティバル」（1969年、東京国立近代美術館）では優秀賞を受賞、1960年代に前橋を中心に活動した「群馬NOMOグループ」のメンバーとしても活動していた。素材そのものや素材と空間の関わりの表現を試み、作品に使われているアルミニウムやワイヤーブラシは、自動車整備工として働く加藤には身近に手に入る素材だった。1980年代には砂鉄や竹を素材とした作品を発表するが、素材は変化しても、円環運動によって生まれる形体には共通するものが見られる。

27 鬼頭健吾 1977年愛知県生まれ、群馬県高崎市在住

名古屋芸術大学絵画科洋画コース卒業、京都市立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。フラフープやシャンプーボトル、スカーフなど日常にありふれた既製品を使い、そのカラフルさ、鏡やラメの反射、またモーターによる動きなど回転や循環を取り入れた大規模なインスタレーションや、立体、絵画、写真など多様な表現方法を用いた作品を発表している。主な展覧会に「六本木クロッシング2007：未来への脈動」（2007年、森美術館、東京）、「MOT×Bloomberg PUBLIC SPACE PROJECT」（2007年、東京都現代美術館）、「世界制作の方法」（2011年、国立国際美術館、大阪）主な個展に「Migration “回遊”」（2015年、群馬県立近代美術館、2015）、「鬼頭健吾 Multiple Star」（2017年、ハラ ミュージアム アーク、群馬）などがある。

28 伊藤存 1971年大阪府生まれ、京都府在住。

1996年京都市立芸術大学美術学部卒業。現在は京都を拠点に活動。2003年にワタリウム美術館（東京）で個展「きんじょのはて」を開催。動植物や人をモチーフとする刺繍の作品をはじめとして、アニメーション、ドローイング、彫刻作品を制作している。どれも移ろいやすく、意識のなかで固定されないような線をとらえて表現するところに特徴がある。2006年「三つの個展：伊藤存×今村源×須田悦弘」（2006年、国立国際美術館）、「Now Japan」（2013年、Kunsthal KAdE、アムステルダム／オランダ）、「アジア回廊 現代美術展」（2017年、元離宮二条城、京都芸術センター）など国内外の展覧会へ多数、参加している。